朝日新聞
DIGITAL

パリで見た日仏バリアフリー事情　モノでなく人の文化とは

有料記事

後藤遼太　2024年9月4日 8時30分

パリ五輪・パラリンピックの選手村の近くで白杖を手に歩く松木沙智子さん=2024年8月10日、パリ郊外のサンドニ、後藤遼太撮影

1900年に開通したメトロに、古い石畳の街並み――。パラリンピックの舞台であるパリは、歴史ある街だ。大会にボランティアとして参加する日本人の視覚障害者が街を歩くと、駅のエレベーターの整備などに遅れを感じる一方、日本では見かけることが少ない習慣に日々助けられている。

パリ地下鉄、車いす対応の駅は1割どまり　パラ選手の「石畳対策」は

福岡市在住の松木沙智子さん（44）は、五輪からボランティアとしてパリに1カ月以上滞在し、選手村などで日本選手団のサポートを担う。

先天性の「網膜色素変性症」という難病で、視野が徐々に狭くなる。いまは視野の中心だけが見えるが、暗い場所ではほとんど見えず、白杖（はくじょう）が欠かせない。いずれは全盲になる可能性が高い。

「昔は、自分が『障害者』だとなかなか受け入れられなくて、白杖を持つのも恥ずかしかった」と話す。ロンドンのパラリンピックを見たのが人生の転機となった。

「障害者の人たちが活躍している姿が衝撃でした」

東京パラリンピックに関わりたいと調理師の免許までとり、選手村の食堂に採用された。ところが開幕の2週間ほど前、選手村から帰宅する際に転倒して足の骨を折り、夢はかなわなかった。

パリ五輪・パラリンピックはようやくかなえた念願だった。

夜空に浮かび上がる聖火（後方）。祝福の花火が上がり、シャンゼリゼ通り（手前）から多くの人が見つめていた=2024年8月28日午後11時41分、パリ、小玉重隆撮影

日本のバリアフリーの充実を実感

選手村や競技会場が集まるパリの街中を歩いて気づいたのが、バリアフリーの遅れだという。

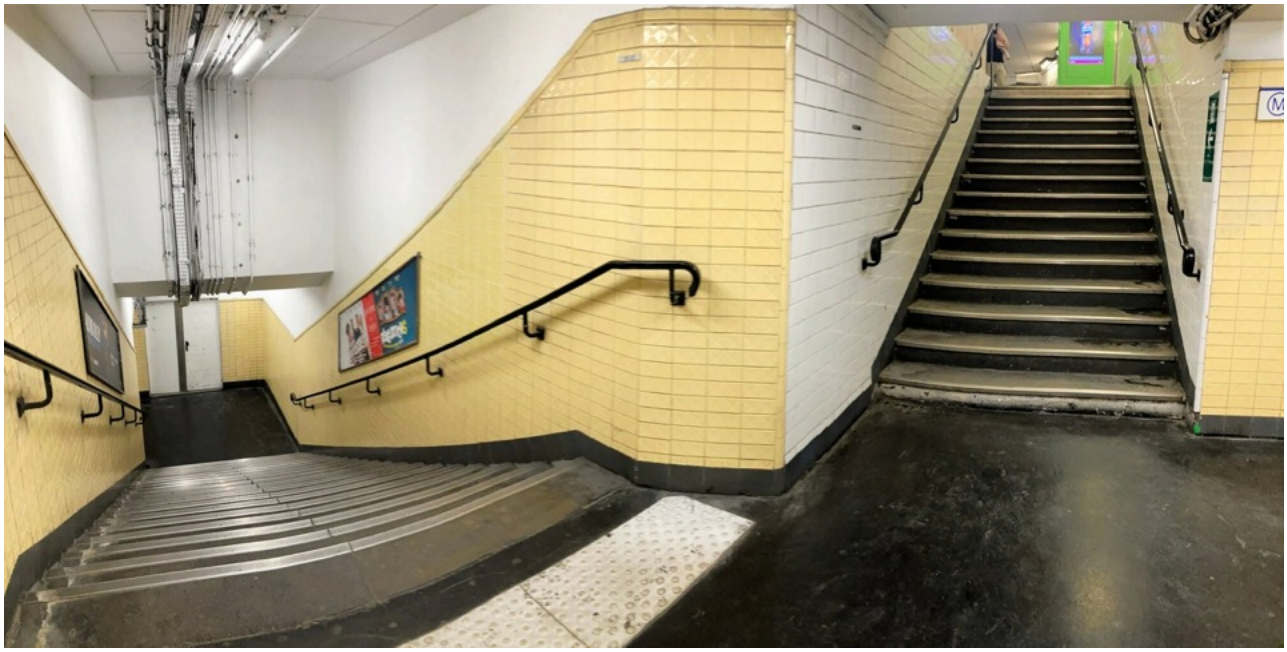
日本では「点字ブロックをたどって行けないところはない」と感じる。サポート無しでも外出に困ることはない。同居するパートナーの男性は全盲だが、いつも一人で外出しているという。

一方、パリは「点字ブロックが少ない。横断歩道の手前も、どこで止まればいいか分かりづらい」。松木さんはかすかに見えるため、日本では黄色い点字ブロックをたどる。パリの点字ブロックは黒や灰色など暗めの色が多く、道路に溶け込み、見えづらい。

地下鉄の駅で差を感じるのはホームドアの設置状況だ。日本の都市部では設置が進むが、パリでは未整備の駅も多い。「暗い構内も多く、ホームドアが無いとかなり怖い」

電車内で気づいたのは音声案内の有無。日本のように駅名や終点を頻繁に案内することは少ない。

「電車の窓から必死に駅名表示を探します。普段、日本でいかに音声案内が命綱だったかを実感しました」。逆方向の電車に乗ったり降りる駅を間違えたり、移動に「3倍くらい時間がかかる」と話す。



市中心部で複数路線が乗り入れるターミナル駅でも、階段のみでエスカレーターやエレベーターが無い場所が多い=2024年8月5日午後3時48分、パリ、後藤遼太撮影（パノラマ撮影）

エレベーターやエスカレーターが無い駅や、あっても故障している場合が多く、下りの階段で怖い思いをすることも。パリ交通公団によると、車いすに対応した地下鉄の駅は全体の1割にとどまる。

日本では、例えば東京メトロと都営地下鉄の全286駅のうち、95%の駅が出入り口からホームまで

エレベーターを使って移動できる。

パリで圧倒的に多いのは「心」

ただ、松木さんは日本には無い、「ソフト面のバリアフリー」を日々痛感しているという。

「横断歩道で待っていたり、駅で迷っていたりすると、必ず誰かが声をかけてくれる。『今なら渡れるよ』とか『ヘルプいる？』って。外国人の私にも臆することがない。『心のバリアフリー』を感じる場面は圧倒的に多いです」

アール医療専門職大学の徳田克己教授（バリアフリー論）は「確かに、物的な面でのバリアフリーは、日本は相当進んでいます」と話す。点字ブロックの設置数も、中国や日本は欧米などより多いという。

ただ、フランスでは点字ブロックを景観に配慮しながら必要最小限に設置するなど、「障害者への支援の文化が異なる」という。

「他の歩行者や景観に悪影響があろうが、『多く設置すればバリアフリーだ』というのは短絡的な考え方です」

アール医療職専門大学の徳田克己教授=徳田克己教授提供

徳田教授が重視するのは「困った時に誰かが声をかけてくれる文化」だ。

「欧米では、学校や教会、自動車教習所などで、障害者への具体的な声のかけ方を学ぶ。日本では道徳の授業で『障害者も一生懸命生きている』といった精神論が中心で、具体的な支援方法は教わらない。その差が表れている。バリアフリーで重要なのはモノではなく人です。日本で支援機器やツールの開発が進んでいるのは、声かけの文化が無いからとも言える」と指摘する。

意識改革、一朝一夕にならず

内閣府が毎年実施するバリアフリーに関する調査では、高齢者や障害者が困っている場合に「ほとんど手助けできていない」「手助けをしていない」「機会がなかった」という回答が、2021年度には40%いた。22年度は37%になったが、23年度は39%だった。

理由は「かえって相手の迷惑になるといや」が約4割に上り、「周囲に気を配る余裕がない」が21年度の20%から23年度は26%に、「自分以外のことに関心がない」が20%から24%に増えた。

内閣府の担当者も「ハード面と違い、意識改革は一朝一夕には難しい」と漏らす。

福祉の街づくりに詳しい東洋大の高橋儀平名誉教授は「東京パラリンピックを契機にハード面のバリアフリー化は大きく進んだが、日本人の意識面は追いついておらず、ちぐはぐなまま慌てて『心のバリアフリー』と言っている状況だ」と話す。その上で、「むしろ、『余計な厄介ごと』に関わらず、見て見ぬふりをするといった風潮が強まっているようにも感じる」と危惧する。（後藤遼太）

国立競技場のユニバーサルデザインを監修した東洋大の高橋儀平名誉教授＝諫山卓弥撮影

パリ五輪・パラリンピックの選手村近くで白杖を手に歩く松木沙智子さん（右）=2024年8月9日、パリ郊外のサンドニ、後藤遼太撮影

この記事を書いた人

後藤遼太

東京社会部｜五輪・平和担当

フォロー

専門・関心分野

平和、戦争、憲法、日本近現代史

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.